



Data 2023-20

監督・脚本: フラン・克蘭ツ
出演: リード・バーニー/アン・ダ
ウド/ジェイソン・アイザッ
クス/マーサ・プリンプトン

👁️👁️ みどころ

スリラーものやアクションものと違い、会話劇だけで映画を構成するのは難しい。退屈な会話の連続なら大半の観客は眠り込んでしまうはずだ。しかし、『十二人の怒れる男』（57年）（アメリカ）をはじめとして、2人だけの会話劇だった『笑の大学』（04年）や、16人の対話劇（会議劇）だった『ヒトラーのための虐殺会議』（22年）等、会話劇には名作が多い。

他方、日本と違って銃にこだわりを持つ“銃社会”の米国では、必然的に銃乱射事件が多い。2018年2月14日のパークランドの高校銃乱射事件はその一例だ。そこでの加害者家族と被害者家族の“会談”からインスピレーションを得た若き俳優フラン・克蘭ツは、自ら脚本を書き、長編初監督まで。

その脚本（＝会話劇）はお見事！4人の俳優の演技もお見事！いかにも今風のバカげた（？）『レジェンド&バタフライ』（23年）が大ヒットしている日本では、本作のような地味ながらメチャ良質な映画のヒットは難しいかもしれないが、こりゃ必見！そして、深い考察が不可欠だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 高校銃乱射事件からインスパイア！初脚本・初監督！ ■□■

アメリカは、日本と「価値観を共有する同盟国」だが、日本と違って銃社会。日本で豊臣秀吉がやったような“刀狩り”は、“自由の国”アメリカでは実行することができず、銃を持ち、自衛することは基本的人権の一つだとさえ言われている。そのため、不幸にもアメリカではたびたび銃乱射事件が起きている。映画では、マイケル・ムーア監督の『ボウリング・フォー・コロンバイン』（02年）やガス・ヴァン・サント監督の『エレファント』（03年）（『シネマ4』221頁）等がある。そして、2018年に2月14日に起きたパークランドの高校銃乱射事件は、その一例だ。

俳優としてキャリアを重ねながら、短編の監督や脚本づくりをしてきた1981年生まれのフラン・克蘭ツは、その事件のニュースで泣きながらインタビューに答える父親の言葉に激しく動揺し、学校内銃撃事件について深く掘り下げるようになったらしい。そして、さまざまな報告書を読むうちに、銃撃犯の両親と犠牲者の両親との会談に関する記述にインスパイアされて、4人の会話だけで、それぞれの息子の成長から過ごしてきた青春の日々、家族との関係、さらには銃乱射事件の現場の状況までが、まるですぐ側で目撃しているかのような奥行きのある脚本を自ら書きあげ、自ら監督したのが本作だ。

■□■会話劇では舞台が大切！あの映画の舞台は？本作は？■□■

会話劇では舞台が大切。笑いを憎む検閲官と、笑いを愛する劇作家二人だけの会話劇だった『笑の大学』（04年）（『シネマ6』249頁）の舞台は、取調室だった。また、12人の陪審員の評議の姿を描いた『十二人の怒れる男』（57年）（アメリカ版）（『名作映画から学ぶ裁判員制度』19頁）、『12人の怒れる男』（07年）（ロシア版）（同書22頁）、『12人の優しい日本人』（91年）（同書27頁）の舞台は、陪審員の評議室だった。

それに対して、高校銃乱射事件の被害者の父ジェイ（ジェイソン・アイザックス）、母ゲイル（マーサ・プリンプトン）と、加害者の父リチャード（リード・バーニー）、母リンダ（アン・ダウド）の4人だけの会話劇である本作の舞台は、教会の会議室だ。映画的には、何の説明もせず、いきなり4人の会話劇から始める手法もありそうだが、本作導入部では、会場の設営に気を遣う人の良さそうな教会のおばちゃん（？）やその息子、さらには聖歌隊の練習風景等が登場するので、それにも注目。これは一体何の意味があるの？そんな疑問も湧くが、それもフランツ監督の練り上げた脚本の1つであるうえ、本作ラストでは、それがよく“効いてくる”ので、なるほど、なるほど。本作は4人の会話劇もお見事だが、舞台セットの妙にも脱帽。

■□■会話のきっかけは？お花は？写真は？本論は？■□■

日本人は、はじめて出会う場合、気候の挨拶や気候の話から入ることが多い。それは、どんな会合でも、本音の話が出てくるまでに、ある程度時間がかかるためだ。しかし、私が弁護士業務を行う場合の基本である「依頼者からの事情聴取」では、一切そういう無駄話をせず、いきなり本論から入ることを心がけてきた。もっとも、それは依頼者 VS 弁護士という立場の中では可能だが、本作のようにはじめて出会う加害者側の両親と被害者側の両親がテーブルを挟んで4人だけで座った場合、何を会話のきっかけにするかは難しい。

本作では、ジェイ、ゲイル夫妻より少しだけ遅れて会場に入ってきたリチャード、リンダ夫妻のリンダが、ゲイルにお花を渡すところから会話が始まるが、それがどことなくぎこちないのは仕方ない。一度はテーブルの真ん中に置いたお花が、「この場にふさわしくない」として、後方のテーブルに下げられたのは当然だが、ジェイに促されてゲイルが持ってきた娘と息子の写真を取り出し、机の向かい側に座るリチャードとリンダに見せると、「美しい娘さん」などと称賛の言葉が……。しかし、「最後のクリスマスよ」と渡された

家族写真を見たリンダは、突然、涙を流して取り乱すことに。これによって、会場の雰囲気は一変し、微笑みが消えてしまったから、さあその後の4人の会話はどうなっていくの？

■脚本の素晴らしさに感服！4人の演技力に感服！■

『笑の大学』は2人だけの会話劇だったから、ある意味、その脚本は書きやすい。しかも、笑いがテーマだから、笑いを愛する劇作家と笑いを憎む検閲官の対比を浮かび上がらせる手法も割と容易だ。他方、『12人の怒れる男』は12人の会話劇だし、陪審評議という目的がはっきりしているから、これもある意味、脚本は書きやすい。また、16人の出席者による会話劇で構成された『ヒトラーのための虐殺会議』（22年）も目的がハッキリしている、という点では『12人の怒れる男』と同じだった。

しかし、本作は何のために4人が集まってきたのか、それ自体が曖昧だ。せつかく会場が設営されているのに、会場に入る前に、ジェイ、ゲイル夫妻は、「このまま帰ろうか」、という会話さえしている。また、4人が席についても、司会進行役がいないから、誰からどんな話を切り出していくのが難しい。しかも、フラン・克蘭ツ監督は、そんな4人だけの会話劇だけで1本の長編映画にしようとしたのだから、その脚本づくりは大変だ。

高校銃乱射事件の報告書の精査と膨大な基礎作業の上に何度も脚本を練り直したそうだが、その出来はお見事。もっとも、いくら脚本が良くても、それを演じる男女2人ずつ、合計4人の俳優の演技が下手くそならぶち壊しになってしまうが、本作に見る4人の演技も素晴らしい。本作には、私がいつも期待する美人女優は全く登場しないが、それはそれとして、本作に登場する4人の俳優たちの名演技に拍手！

■アクションなし！回想シーンなし！その功罪は？■

本作は、2018年2月14日に起きたパークランドの高校銃乱射事件によって子供を失った、加害者側の両親と被害者側の両親との“対峙”を描く映画。それに対して、『エレファント』は、1999年4月にコロラド州のコロンバイン高校で起きた銃の乱射事件を描くものだった。『エレファント』は、2003年のカンヌ国際映画祭でパルムドール賞と監督賞をダブル受賞した話題作だが、その評論で私は、「結論を言うと、その期待は大きく裏切られてしまった。」と書いた。また、同作で「あえて自分流の解釈を何も示さなかった」ことについて、「パンフレットの中で監督自身が『特に何かを説明したいわけじゃないんだ』と述べるように、ホントにこの映画では何の解釈も示されていない。しかし、私はどうもその点に違和感を覚えるし、それだから、この映画はつまらないと思ってしまうのだが… …？」とも書いた。その理由は、第1に、「同性・異性愛会」での会話等を中心として、前半では当事者たちの生態が詳しく描かれるものの、それがあまりに淡々としているため観ていてかなり退屈なこと、第2に、後半は一転して激しい銃乱射シーンになるものの、2人の“犯人”が校内を歩き回って銃を乱射するシーンが続くだけであるうえ、2人が落ち合った後、一方が他方を撃ち殺すのが一体なぜなのかがサッパリわからないためだ。そんな

な不満を持ちつつ、私は同作後半の銃乱射シーに米国の銃社会の病巣を強く感じ取ることができたから、同作が大きな問題提起になったことは間違いない。

しかし、同じ高校における銃乱射事件をテーマにした本作には、目玉となる（銃乱射の）アクションシーンは一切登場しない。そればかりか、加害者たる少年も被害者になった少女少女たちも誰一人登場しないから、パークレー高校における銃乱射事件がどんな実態だったのかすら一切わからない演出になっている。ちなみに、2月5日に観た『レジェンド&バタフライ』（23年）では、予想だにできなかった「本能寺の変」の中、死を覚悟した信長が床の下にコソコソと逃げ出していったから、アレアレレ。そう思っていると、さらに本能寺から無事脱出した信長（レジェンド）は、愛妻の帰蝶（バタフライ）と共に、長年の夢だった南蛮行きの大船に乗っていたから、さらにアレレ、アレレ。もともと、それは信長が切腹する前の壮大な回想シーン（妄想シーン？）だったが、こんな演出はあまりにもバカげていると言わざるを得ない。それに比べると、本作が回想シーンを一切使わなかったことの意味（意図）は、フラン・クラantz監督のインタビューの言葉のとおりハッキリしているので、その功罪をしっかりと考えたい。

■教育刑 VS 応報刑。修復的司法とは？会話の効用は？■

刑法の勉強は犯罪論と刑罰論の2つだが、刑罰論には教育刑と応報刑という2つの考え方がある。現在の刑法は応報刑だが、少年法では少しずつ教育刑の考え方も……。そんな旧来からの議論に対して、近時は“修復的司法”の考え方が広がっているらしい。これは、対話を積極的に取り入れたもの。つまり、従来の刑事司法が国家 VS 加害者であるのに対して、被害者と加害者が直接問題点を見つめ直す取り組みで、海外ではオーストラリア、アメリカ、ノルウェーなどで実践されているそうだ。本作には、「被害者と司法を考える会」代表の片山徒有氏のコラム「映画『対峙』を観て思うこと」があるので、これは必読！他方、立田敦子氏（映画ジャーナリスト）のコラム「憎しみと報復、負のサイクルからの救済」は、本作で4人の俳優が被害者側、加害者側の当事者（父母）として見せるさまざまな心情を的確に分析し解説してくれているので、これも必読！

本作は、約2時間の映画だが、そのほとんどが4人の会話時間に使われている。2時間近くも、あれだけ真剣に話し合ったのだから、4人とも疲れきっているはずだ。しかし、会場に入ってくる際の迷いと不安に満ちた4人の表情と、別れていく際の希望と確信に満ちた4人の表情は、わずか1時間半の話し合い（修復的司法）でこれだけ変わるとは！本作は、司法関係者はもとより多くの人々が鑑賞し考え、そして納得すべき映画だと確信！

それにしても、近時の邦画が、『レジェンド&バタフライ』をはじめとして、なぜバカバカしいエンタメ調ばかりが多く、本作のような真剣に心を打つ映画がないのだろうか？それは言うまでもなく、日本国民のレベル全体が低下しているためだが、何とかしなければ……。

2023（令和5）年2月13日記